

Title	モーリタニア、トラルザ地方のマータ・ムラーナ村の 試み：ニアセン信徒たちによる「教育都市」計画
Author(s)	盛, 恵子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2016, 27, p. 101-120
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71119">https://doi.org/10.18910/71119</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# モーリタニア、トラルザ地方のマータ・ムラーナ村の試み — ニアセン信徒たちによる「教育都市」計画 —

盛 恵子

## 0. はじめに

ティジャーニー教団は、アルジェリア生まれのスーフィー、アフマド・ティジャーニー(1737/8-1815)によって創設されたが、その分派のひとつに、セネガルに生まれたイブラヒマ・ニアス(1900-1975)を祖とするティジャーニーヤ・イブラヒミーヤがある。この分派はセネガルでは、ニアセン(Niassène)と呼ばれる。筆者は、ニアセンのサハラ以南アフリカへの急速な拡大とニアセンの中心的な教義の概要を、先行文献<sup>1</sup>とセネガルで行った調査とに基づいて紹介した(盛 2014)。そしてこの中で、ニアセンの国際的な成功の契機は、モーリタニア、トラルザ地方のイダウ・アリー(Idaw 'Alī)部族の学者たちがニアスに帰服し、彼によってムカッダム(muqaddam)<sup>2</sup>に指名されて宣伝活動を行ったことである、というゼーゼマンの指摘(Seesemann 2004, 2011)を紹介した。ニアセンでは、すべてのムカッダムはシャイク(shaykh)<sup>3</sup>と呼ばれる。後述するように、モーリタニアにはザワーヤ(Zawāya)という宗教的な役割を担う社会階層があるが、イダウ・アリーはザワーヤに属す部族の中で、最も尊敬されるもののひとつである(Stewart 1973: 30)。

ここで取り上げるトラルザ地方のマータ・ムラーナ(Mu 'ṭa Mawlānā)村は、イダウ・アリー部族の高名なシャイク、ムハンマド・ミシュリ(1916/17-1975)によって創られ、住民の約9割がニアセン信徒である<sup>4</sup>。現在、彼の息子アブダラー・ミシュリ(1954-)、通称アル・ハジが村を率いているが、彼は「教育都市」計画を提唱して村の発展と近代化に着手し、一定の成功を収めている。本稿で「教育都市」と訳したものの原語は、後述する村の公式ウェブサイトの表題の中に現れる、al-madīna al-tarbawīya, educative city, cité educative 等である。この村は、砂漠の中の村としては例外的な近代設備を備え、アフリカ諸国や欧米の学生がイスラームを学びに集まる。本稿は2014年に行った現地調査に基づいて、アル・ハジの「教育都市」計画が、イダウ・アリー部族が伝統的に担ってきた宗教的役割とニアスの教えと

<sup>1</sup> たとえば Paden (1973), Hiskett (1980), Hutson (1999), Seesemann (2004, 2011)など。

<sup>2</sup> ムカッダムはスーフィー教団で、加入希望者を教団に加入させる資格を持つ指導者。

<sup>3</sup> シャイクは、スーフィーの師に対する尊称。

<sup>4</sup> Mu 'ṭa Mawlānā は、「神によって与えられたもの」を意味する。

の結合を手段として推進されつつある、独創的な「村興し」計画であることを示そうとする<sup>5</sup>。トラルザ地方はモーリタニア南西部に位置し、その西海岸には首都ヌアクショットがあり、その南部はセネガル河を挟んでセネガルに接する。ニアスが直接指名した高名なムカッドムたちはすでに亡く、彼らの息子たちが、後継者として指導的役割を担っている。彼らの中には、イダウ・アリー以外の部族に属すが、イダウ・アリーと近い親族関係を持つ者たちが含まれる。彼らの部族もすべて、ザワーヤに属す。

## 1. イスラームの守護者としてのザワーヤ

モーリタニアは、地理的にマグリブと黒アフリカの接点に位置し、その住民は、ハッサーニー・アラビア語の話者でモール人と総称される人々と、南部のセネガル河流域を伝統的居住地としそれぞれの民族語を話す、フルベ、ウォロフ、ソニンケなどの黒人諸民族からなる。モール人の伝統社会は分節社会であり、また階層化されている。頂点にアラブ系の戦士階層ハッサーニー(Hassānī)が、次にベルベル系で宗教的な役割を担う階層ザワーヤがあり、これらは貴族階級を構成する。その下に、農民・牧民であるゼナガ(Zenagha)と黒人の解放奴隷ハラティン(Haratin)からなる、従属者・貢納者階級がある。ザワーヤはハッサーニーにとっては貢納者であると同時に、自らも貢納者を持つ。ザワーヤは紛争の決着のための武力行使を行わず、イスラームの専門家としてモール人社会の宗教的保護者とみなされた。ザワーヤの学者たちは教育者、裁判官、ハッサーニーの有力者の助言者、紛争の調停者として活動した<sup>6</sup>。ハッサーニーの主な収入は略奪と、貢納者を保護する見返りとして彼らから徴収する税だった。ザワーヤの学者たちは、貢納者から捧げられるところのさまざまな名称と形態の宗教的な贈り物として収入を得たが、これらは実質的には税だった。ハッサーニーの部族の長は、部族の年長の有力者たちの中の一人にすぎず、従って彼は独立した行動を取ることができない。彼の権威は世俗的なもので、それが及ぶ範囲は限定される。これに対してザワーヤは、理論的には世俗的な権力を持たない。ザワーヤの部族

---

<sup>5</sup> 現地調査はトラルザ地方で2014年1月17日から2月14日まで、盛弘仁とともに行った。調査地は、ニアセンのシャイクによって創設されたマータ・ムラーナ、トゥンブヤーリ、バレイナ、ブバカル、バーブ・アル・ファトゥフの5つの村と、ヌアクショットである。本稿では、インタビューで得られた情報、発言の後には( )を付し、日付、場所、情報提供者の地位と名前を示した。

<sup>6</sup> ザワーヤのすべての成員が学者であるわけではない。伝統的にザワーヤは塩の採掘と販売、アラビアゴムの収集と販売、キャラバンによる交易を行った。ザワーヤはハッサーニーよりも人数が多く、より富裕であり、彼らが所有する家畜は、モーリタニア全体の家畜の最も大きい割合を占めた。またザワーヤだけが、井戸を掘り維持する権利を持っていた(Stewart 1973: 56, 60, 63)。

の長の権威はアッラーに由来するとみなされるので、彼は単独で決定することができ、成員の反対を受けない。その結果彼は強い指導力を持ち、社会的・政治的に大きい影響力を行使することができる (Stewart 1973: 13-16, 54-58, 61-66)。後述するようなアル・ハジの強いリーダーシップは、彼の権威のイスラーム的な性格に由来する。

## 2. マータ・ムラーナ村の創設

アル・ハジの父であるムハンマド・ミシュリは、親族と弟子の数家族を率いて遊牧生活を送っていたが、1958年に、フランスが掘ったある井戸の周りに定住した<sup>7</sup>。アル・ハジの祖父アブダラー・ウルド・アル・ハジ(1927 没)は、ニアセンの創設者イブラヒマ・ニアスの権威の確立にとって、最も重要な人物のひとりである。彼が属すイダウ・アリー部族は、預言者ムハンマドの子孫とみなされている<sup>8</sup>。モーリタニアにティジャーニー教団を最初に導入した学者ムハンマド・ハーフィズ(1759 頃-1830)もまた、イダウ・アリーだった。ムハンマド・ハーフィズの布教によって、彼が死ぬまでに、イダウ・アリーの成員のほとんどがティジャーニー信徒になった(Marty 1916: 215)。アブダラー・ウルド・アル・ハジは高名なシャイクであり、モーリタニアのみならずセネガルにも弟子を持った。彼は予知能力を持つと信じられていた(Marty 1916: 223)。彼は、イブラヒマ・ニアスの父であるアブドゥライ・ニアス(1922 没)と親交があり、アブドゥライのカオラックの修道場をしばしば訪問した。イブラヒマはアブダラー・ウルド・アル・ハジに親しみ、彼を父以外の唯一の師とみなした(Seesemann 2011: 39)<sup>9</sup>。イブラヒマは1929年に、自分が神の恩寵の洪水ファイダ(fayda)を受け取ったと宣言し、ティジャーニー教団の新しい分派ニアセンを創設した<sup>10</sup>。アブダラー・ウルド・アル・ハジは幼児であったイブラヒマを見て、ファイダが彼のもとに出現するであろうと予言したといわれる<sup>11</sup>。彼はヒジュラ歴 1345 年(西暦 1926/7 年)にイ

<sup>7</sup> トラルザのイダウ・アリー部族は駱駝、山羊、羊、牛の遊牧を行い、乾期にはマータ・ムラーナから約 50km 南にあるルキーズ湖のほとりに移動した。彼らの食事は乳、肉、穀物の粥だった。彼らはルキーズ湖のほとりに広い農地を持ち、そこで奴隷に穀物を作らせていた(2014年1月28日 マータ・ムラーナ アル・ハジの助言者モハメット・ハーフィズ・ハイリ)。

<sup>8</sup> イダウ・アリーは、預言者ムハンマドの従弟かつ娘ファーティマの夫であるアリーの子孫とされる。イダウ・アリーの系譜については、Marty (1916), Norris (1962), Dedoud (2000), 荻谷(2012)等を参照されたい。

<sup>9</sup> イブラヒマ・ニアスは一般のイスラーム学者とは異なり、父からのみ教育を受けた。

<sup>10</sup> ファイダの観念については Seesemann (2011: 42-47)に詳しく、その要約は盛(2014:95-96)にある。

<sup>11</sup> ニアセンの本拠地カオラックとその周辺で語られる伝承は、おおむね次のようである。アブダラー・ウルド・アル・ハジは最初、自分がファイダの受取り手であると思っていた。しかしファイダは彼に出現しなかったため、受取り手を捜す旅に出た。アブドゥライ・ニアスのもとに滞在したと

ブラヒマをティジャーニー教団のムカッダムに指名したが、その免許の伝授の鎖(silsila)はイブラヒマを、ムハンマド・ハーフィズの流れを汲むモーリタニアの最も有名なシャイクたちに結びつけることによって、イブラヒマの権威の確立に資した(Seesemann 2011: 39)。それゆえ、アブダラー・ウルド・アル・ハジの息子であるムハンマド・ミシュリが 1937年にイブラヒマの弟子になったことは、イダウ・アリーにおけるニアセンの発展にとって決定的だった(Seesemann 2011: 86)。ムハンマドの息子であるアル・ハジは、1971年にイブラヒマの弟子になった。彼は、預言者ムハンマドの言行録(hadīth)の専門家として名高い。彼はダカール大学で経済学を学んだが、父の死によって大学を中退し、村長を継いだ。

マータ・ムラーナ村は、イスラーム聖者とみなされるムハンマド・ミシュリとアル・ハジの徳を慕って各地から集まった人々の共同体であり、小規模な神権国家といえる。この村では、大は村の将来を方向付けるプロジェクトから、小は留学生めいめいの勉学・食住の世話をいたるまでが、アル・ハジの直接の指示によって行われる。アル・ハジは近代的な考え方とカリスマを兼ね備えた指導者であり、村を急速に発展させた住民は語る。

### 3. マータ・ムラーナ村の概要

マータ・ムラーナ村は、ヌアクショットから南東約 180km の、南北に平行して走る 2 つの砂丘の間の窪地にある<sup>12</sup>。現在の人口は、村人たちによれば 3000 人以上<sup>13</sup>である。住民はさまざまな社会階層と部族からなるが、イダウ・アリー部族の人数が優越する。村では駱駝、山羊、羊、牛の放牧が行われる。成人男性の多くはヌアクショットに働きに出、週末に村に戻る。商業に従事する者もいる。村は発電機を備え、朝と夜に数時間ずつ家々に電気が来る。機械掘りの深井戸からの水が、各戸に引かれている。

村は 8 つの街区に分かれている。アル・ハジは 8 つの街区と村の西にある砂丘に、イブラヒマ・ニアスが著書 “*The Three stations of the deen/religion*” (Niasse 2013)の中で挙げた 3 つの宿処(maqāmāt)の、各々に 3 つづつ割り当てた 9 つの段階(manāzil)の名をつけた<sup>14</sup>。

---

き、彼はアブドゥライの息子たちを見たいと言った。アブドゥライは息子たちをひとりずつ彼に見せたが、当時イブラヒマはあまりに幼かったので見せなかった。アブダラー・ウルド・アル・ハジはまだひとりいるはずだと言い、イブラヒマが連れて来られると、これこそが探していた人だ、私が死んだらこの子のもとにファイダが現れるだろう、と言った。

<sup>12</sup> ヌアクショットへは、日本製四輪駆動車で 3 時間半かかる。最初の 50km は、砂の上を走る。

<sup>13</sup> 統計局では 2000 年より新しい数字が得られなかったため、村人の挙げる数字を採用した。

<sup>14</sup> これら 3 つの宿処と 9 つの段階は、後述するイブラヒマ・ニアスのタルビヤにおける、神の認識に至る諸段階に結びつく。街区はそれぞれタウバ(tawba 悔悟)、イスティカーマ(‘istiqāma 正しさ)、タクワー(taqwā 敬虔)、スイドゥク(ṣidq 真実)、イブラース(‘ikhlāṣ 献身)、トゥマアニーナ(ṭuma’nīna

各街区の区長は男性であり、部族や年齢ではなく廉直と誠実を基準として、区民によって選出される。区長たちは毎週土曜日にアル・ハジの家に集まり、アル・ハジを長とするこの集会で、村全体に関わる事柄が決定される。モール人の伝統社会には年齢集団が存在しないが、アル・ハジは男女を年齢によって4つの集団に組織し、それぞれに役割を割り当てた。たとえば村が砂に埋もれるのを防ぐための砂掻きは、最も若い男性集団の仕事のひとつである。村の家屋の多くでは男性の場所と女性の場所が分かれており、女性は1枚の長い布で顔と手以外の全身を覆い、家族以外の男性にできるだけ姿を見せないようにする。

村の北のはずれには、アル・ハジの発案による<sup>なつめやし</sup> 棗椰子園と菜園がある。アル・ハジは自分が所有する数百本の棗椰子の木からの収穫物を、すべて村人に分け与える。菜園は小区画に細分されており、耕作権を持つ村人たち一主に女性である一が自分の区画を使用する。この菜園は村外の市場向けの野菜の生産を目的として作られた。しかし現実には、耕作者の自家消費分を除いたわずかな余剰分が村の市場で売られるにすぎない<sup>15</sup>。村の南には、これもアル・ハジの発案による薬草園があり、園で栽培した薬草を薬や石鹼などに加工して都市で売ることを目指した。しかし、収穫物の商品化には至らぬままに閉鎖された。

## 4. 「教育都市」としてのマータ・ムラーナ村

### 4.1 イブラヒマ・ニアスとアル・ハジの思想

アル・ハジが、いつマータ・ムラーナ村を教育都市と名付け、その発展をプロジェクトとして組織化したのかについては未調査なのだが、この村をイスラーム世界の模範となる「教育都市」にしようとするアル・ハジの「教育都市」計画は、その理念において、イブラヒマ・ニアスの思想とモール人の伝統に依拠している。まず、ニアスから継承したと考えられる3つの要素を挙げよう。

ニアスは、イスラームを正しく実践するためには神を認識することが必須であるとみなした。彼は神を認識するための宗教的訓練タルビヤ(tarbiya)の新しい方法を案出し、これを受けられることを、教育の有無、年齢、性別を問わずすべての信徒に対する義務とした<sup>16</sup>

---

静かさ)、ムラーカバ(murāqaba 沈思黙考)、ムシャーハダ(mushāhada 見ること)、マアリファ(ma'rifa 神についての知識)と名付けられている。イダウ・アリー部族の人々は、モスクに近く古い街区であるイスティカーマとタクワー、そしてムラーカバの一部に多く住む。

<sup>15</sup> 区画は一辺が約5~15mの長方形で、棗椰子、レタス、ビート、人参、ミント、トマト、玉葱、キャベツ、サヤインゲンなどが作られる。耕作者は、1日2回水やりをする。

<sup>16</sup> タルビヤは義務であるとはいうものの、現実には、国によってタルビヤ実践の状況は異なる。現在セネガルではニアセン信徒のほぼ全員が、主に青年期にタルビヤを行う。しかしモーリタニアでは

(Seesemann 2011; 盛 2014)。第1の要素である世界市民主義(cosmopolitanism)は、このタルビヤと関係する。タルビヤを受けたセネガル人のニアセン信徒たちは、神を認識する体験の後で人生観がすっかり変わると語る。存在するのは神のみである。他者はすなわち自分であり、したがって他者を害してはならない。人間は人種、民族、宗教を問わず、平和に共存しなければならない(盛 2014)。タルビヤを受ける目的はこの真理を知ることであり、ニアスが求めたものは世界の平和であると語られる<sup>17</sup>。ニアスはまた特に黒人差別に関して、主著 “*The Removal of Confusion. Concerning the Flood of the Saintly Seal Ahmad al-Tijani*” の付録VI Racial Discrimination in the Spiritual Path の中で、人間の高貴さは血筋ではなく敬虔さ(taqwā)に由来するので、「皮膚の黒さは(主の)近くに引き寄せられた者たちの地位に入ることを妨げない」 (Niasse 2010: 253-258)と述べた<sup>18</sup>。

第2の要素は、科学技術に対する肯定的態度である。ニアスは科学技術の発展に伴う革新について、それがイスラームの発展を促し強化するものであれば何であれ、取り入れるべきだとした。1954年にナイジェリア北部で、ラジオでコーランの朗唱を流すことは許されるべきか否かを巡って論争が生じた時、意見を求められたニアスは、回答としてこの見解を公式に表明した。この時ニアスは印刷所、ラウド・スピーカー、巡礼を容易にする飛行機、トラックなどを、イスラームを発展させるところの推奨される革新の例として挙げた (Paden 1973: 132-133)。

第3の要素は、女性の宗教的な地位向上である。ニアスは “*The Removal of Confusion*” の付録VII Femenity and Sainthood の中で、女性であることは、神に選ばれた僕の中の最高の者の中に含まれることを妨げない。スーフイズムにおいて人間が到達するとされるすべての宗教的段階の中には、最高の3つの段階すなわち、預言者性(nubuwwa)、使者性(risāla)、

---

タルビヤを行う者の年齢はより高く、行う割合はより低く、特に女性において低い。

<sup>17</sup> この根拠としてセネガルのニアセン信徒たちは、ニアスは「地球はひとつの村のようなものであり、昼間はみな村の発展のために働き、夜は銘々の家に戻る」と言ったと語る。ハビブ・ニャンはこの言葉を、ニアスがンクルマ大統領によってガーナに招待された際の、同じく招待客だったソビエト連邦のブレジネフ書記長に対する言葉として記録した。ニアスは、このようにするならば、何の共通点も持たない無神論者とムスリムも平和に共存できると付言した(Niang 出版年不明: 128-129)。ハビブ・ニャンはニアセン信徒であり、ニアスとンクルマの間の伝達係を務めた。

<sup>18</sup> マータ・ムラーナの人々は、この村には人種差別がないと誇る。アル・ハジの側近のひとりのことばを挙げよう。「我々モール人の社会には人種差別の伝統があるが、それはイスラームに照らせば悪である。私は預言者ムハンマドの子孫であり、シャイク・イブラヒマ・ニアスはセネガルの黒人だが、彼はムスリムの模範として私より優れているので、私は彼に従うことができる。我々モール人には、我々は黒人よりイスラームをよく知っているというイデオロギーがあるが、それは間違っている。そのように考えるのは下等な人間だと私は思う」。(2014年1月21日 マータ・ムラーナモハメット・フラーニー)

スーフィー聖者のヒエラルヒーにおける最高位の聖者(qutb)の性質(qutbaniyya)を除けば、「心から敬虔、純粹、そして公正な、善に満ちた本物の信者である女性で満ちていないものはない」と述べた。しかし女性には月経があるので、最高の3つの段階には男性しか到達できない(Niasse 2010: 259-263)。ニアスは女性に対して学問を奨励し、彼の娘たちの中にはイスラーム学者や女性のシャイクとして有名な人々がいる。またセネガルとナイジェリアのニアセン信徒の中には、多くの弟子を持ち社会的に尊敬を集める女性のシャイクたちがいる(Hutson 1999; 盛 2014)。

次に、アル・ハジ自らが述べたところを要約する。アル・ハジは、ニアスから直接タルビヤを受けた。彼にとってニアスは人間の理想であり、彼は直接的間接的にニアスから多くを学んだ。ニアスの本質は教師であり、言葉ではなく行動で教える教師だった。ニアスの使命は、人々を真のイスラームに回帰させることだった。だからニアスは、イスラームの中に導入された非イスラーム的な伝統、すなわち社会的階層制度や人種差別などをイスラームから除去しようとし、また人間の間の友愛、平等、尊厳を説いた。またニアスの精神は、イスラームとセネガルとにしっかりと根ざしていながら、同時に開放的だった。ニアスは、両立が困難なこの相矛盾した態度を両立させていた。アル・ハジはまた、ニアスが“*The Removal of Confusion*” (Niasse 2010)の中で特に黒人と女性について書いたことを指摘し、ニアスは女性に重要性を与えたと述べた<sup>19</sup>。

ニアスの思想に見いだされる世界市民主義、新しい科学技術の受容、女性の宗教的な地位上昇、そしてアル・ハジがニアスから学んだと自ら語る真のイスラームへの回帰と、イスラームと自文化の両方の価値を護りつつ開放的であろうとする態度は、アル・ハジの神権的なリーダーシップを通じて、マータ・ムラーナ村において実現されつつある。

## 4.2 「教育都市」計画の理念と内容

マータ・ムラーナ村の「教育都市」計画は、インフラストラクチャーという側面では2014年1月当時、電気、水道、普通教育の学校、保健所といった生活の基本的な設備が実現していたが、後述するようなさまざまな施設は、実現のめどが立っていなかった。しかしこの計画は村の未来の設計図として住民に希望と目的意識とを与え、行動に深い影響を与えている。「教育都市」計画の理念と具体的な内容の一部は、“Maatamoulana—Cité Educative” (「マータ・ムラーナ: 教育都市」<http://matamoulana.net>) という5つの言語による村の公式ウ

<sup>19</sup> (2014年1月27日 マータ・ムラーナ アル・ハジ)



ウェブサイトに公開されている<sup>20</sup>。また筆者がマータ・ムラーナで入手した、“La Cité Educative de Maata Moulana Mauritanie —un espace d'épanouissement spiritual” (『教育都市マータ・ムラーナ、モーリタニア: 宗教的開花の場所』) という題の、2010年から2014年の5カ年発展計画を記した刷り物にも書かれている。この2つの内容を要約すれば、以下ようになる。

マータ・ムラーナの住人の先祖は、遊牧を営みつつ学校を運営し、イスラームの知識の獲得と普及に熱心だった<sup>21</sup>。しかし村の創設者ムハンマド・ミシュリは、近代化から得られる利益を知って、先祖から継承した価値を維持しつつも定住を決断した。マータ・ムラーナは、教育に絶対的な優先順位を置く。村の方針は ①毅然とした孤立と良い慣習に従うこと ②近代教育と伝統教育の両立 ③部族の枠にとらわれない新しい市民社会 (*société civile*)の創設 ④発展と快適な生活に必要な最小限のものを重視する ⑤マータ・ムラーナの住人すべてが知識を得る である。マータ・ムラーナは、人間に全人的な教育を提供する場となることを目指す。この村で学びたい者は、誰でも歓迎する。

①の「毅然とした孤立」とは、可能な限り政府から独立し政府に依存しないことを意味する。テュクワによれば、地方税はアル・ハジが村の名前で支払い、行政は個人からの取り立てに関与しない(Tuquoi 2008)。上記のマータ・ムラーナのウェブサイトは、資金難のために「教育都市」計画の多くのプロジェクトが実現していないことを率直に認めている。したがって英語版に現れる「我々は君たちが、よりよい世界のための、よりよい教育というこの偉大な企ての発展に参加することを歓迎する」という記述は重要である。これについては後述する。住民は「教育都市」計画を熱心に支持し、銘々の立場で役割を担う<sup>22</sup>。

「教育都市」計画は、アル・ハジの父の名前に因んで命名された「ムハンマド・ミシュリ学院」の実現によって完成する予定である。この学院は、すでに国に認可されている。

---

<sup>20</sup> このウェブサイトはアル・ハジの発案によって、村の青年たちによって作られた。ポルトガル語、スペイン語、英語、フランス語、アラビア語の5つの版がある。

<sup>21</sup> ザワーヤの部族の学者たちが遊牧生活の中で行ったところの伝統的なイスラーム教育の具体的な細部については、(El Hamel 1999)に詳しい。

<sup>22</sup> この村の住民の意識を代表すると思われる発言を挙げる。

「我々は、マータ・ムラーナが大きな都市、世界の諸国と友好関係を持つ都市になることを望む。教育都市として、大きな大学として、世界に知られることを望む。我々は本物のイスラームを示したい。イスラームにおいて、他のすべての事柄において、良い手本になりたい。我々は、国家が我々を助けるとは思わない。我々を助けるのは、良い教育を受けた我々の子供たちだ。我々は彼らを外国で学ばせ、彼らはここにいろいろな知識・技術を持ち帰るだろう。我々は村人を組織化し、発展をめざしてさまざまなプロジェクトを行う。目標は遠い。しかし次の世代が、我々の仕事を引き継ぐだろう。モーリタニア人は食べて寝るだけだが、我々は別のメンタリティーを持っている。」(2014年1月27日 マータ・ムラーナ 高等学校の数学教師かつ区長 モハメット・ディディ)

それは 8 つの部門を持ち、8 つの街区に配分されたさまざまな施設を統括することになっている。しかし現実には、学院の本部すら建設されていない。計画されている施設は、先端技術を教える職業訓練学校、図書館を備えた文化センター、村を訪れる外国人にイスラームを説くことを目的のひとつとするところの、7 つの言語を教える語学学校、病院、インターネット・センター、外国人学生のためのゲストハウス、飛行場等である<sup>23</sup>。

## 5. マータ・ムラーナ村の教育

教育を最優先するという「教育都市」の理念は、住民の意識に内面化されている。マータ・ムラーナ村には、普通教育の学校(以下、普通学校と略す)とイスラーム教育の学校の 2 種類の学校がある。アル・ハジは、子供が毎日普通学校で 6 時間、コーラン学校で 4 時間学ぶことと定めた<sup>24</sup>。普通学校は木金休み、コーラン学校は水木休みなので、子供にとって完全な休みは木曜だけである<sup>25</sup>。村の区長たちは、外国の暴力的な映画などが子供たちに及ぼす有害な影響を懸念して、TV の禁止を決めた。子供たちは木曜の夜にアル・ハジの家で、教育的な映画を見せられる。アル・ハジは、暴力的なスポーツであり子供の興味を勉強から逸らすという理由で、子供たちがサッカーをすることを禁止しようとしている。インターネットは教育に不可欠だと考えられており、普通学校やコーラン学校の教師たちは、インターネットで得た情報や画像を授業の中で利用する<sup>26</sup>。

モーリタニアの普通教育の制度は、フランスのそれに倣っている。この村には小学校が 3 校と、中学校と高等学校が 1 つになった中・高等学校が 1 校ある。第 1 小学校は 1960-61 年の学期に、第 2 小学校は 2005 年以前に、第 3 小学校は 2009-10 年の学期に始まった。中・高等学校は 1999 年に作られた<sup>27</sup>。この村の親たちは、男女の子供全てを小学校にやる。彼

<sup>23</sup> この語学学校では、国内の言語であるアラビア語、ウォロフ語、フルベ語、ソニンケ語と、国際言語であるアラビア語、フランス語、英語、スペイン語の 7 言語を教える予定である。アラビア語がその重要性ゆえに 2 度挙げられるので、4+4=7 がこの語学学校のスローガンとなっている。

<sup>24</sup> 村の生徒の日課のモデルは、次の通り。5 時起床。コーラン学校で 2 時間学ぶ。朝食を取り、8 時から 12 時まで普通学校。12 時に家に戻って昼食。14 時から 16 時まで普通学校。続いて 16 時から 18 時までコーラン学校。家に戻って普通学校の教科の復習。しかし実際は、ここに毎日 5 回の礼拝、登下校の時間などが含まれるので、モデル通りにはいかないという。小学生から高校生に至るまで、生徒は早朝の最初の礼拝を行うために、5 時に起床しなければならない。

<sup>25</sup> 後述するように、村にはイスラーム教育の学校が 3 種類あり、コーラン学校はそのひとつである。

<sup>26</sup> 教師たちは、ノート PC にモデムを挿してインターネットを使用する。村には屋根に太陽電池パネルを置いた小さいインターネット・センターがあるが、筆者はそこが利用されているのを見なかった。

<sup>27</sup> 2014 年 1 月にこれらの学校の校長たちから聞いた、各校の生徒数と教師数を挙げる。第 2 小学校だけはまだ今年度の集計ができていなかったの、前年度の数字である。第 1 小学校は生徒 332(男

らは教育熱心で、学校の方針に従い、学校に協力する。また雨期にも子供を耕作や牧畜で働かせることなく、一年を通じて子供を学校にやる<sup>28</sup>。小学校の生徒の65~70%が、中学校に進学する<sup>29</sup>。普通学校は、すべて公立である。村は、国が雇う人数の教師だけでは十分な教育ができないとして、不足する人数の教師を独自に雇う。普通学校の教師の中には、単身赴任している人々がいる。アル・ハジは、彼らを村に定着させて十分な仕事をさせるためには、彼らの生活を保障することが必要だと考えて、彼らを無料の宿舎に住まわせ、無料で食事・水道・電気を提供する。

すべての小学校で、男の生徒は女の生徒の2倍以上の人数である。ヌアクショットやヌアディブなどの都市に住む親が、マータ・ムラーナ村の砂漠に囲まれた自然環境と、近代教育と伝統教育の両立というアル・ハジの方針を子供の教育に理想的だと考えて、息子を村に送ってくる。また、西アフリカ諸国から黒人の少年たちがコーランを学びに来ることが、その理由である<sup>30</sup>。少女が単独でこの村に学びに来ることはない。この村では外国の少年たちも、コーラン学校と小学校の両方に通うことができる。これはこの村の周辺の、同じくニアセンのシャイクが村長であるトゥンブヤーリ村やバーブ・アル・ファトゥフ村とは異なる。これらの村にもアフリカ諸国の少年たちがコーランを学びに来るが、村の小学校はモーリタニア人専用となっており、彼らはそこには通えない。マータ・ムラーナ村の高等学校は、大学入学資格試験の合格者数が全国最高だったことが2~3回あるので、全国の親がこの学校で子供たちを学ばせたがる<sup>31</sup>。2014年度の受験予定者は89人で、毎年

---

215 女117)、教師10(男9 女1)。第2小学校は生徒315(男211 女104)、教師9(男8 女1)。第3小学校は生徒189(男140 女49)、教師7(男6 女1)。中学校は生徒約320、高等学校は生徒約200。いずれも約40%が女。教師は中高を合わせて22(男18 女4)。

<sup>28</sup> (2014年1月26日 マータ・ムラーナ 中・高等学校の校長モハメッド・サリム)

<sup>29</sup> (2014年1月29日 マータ・ムラーナ 第3小学校の校長ムハンマド・サレム)

比較のためにモーリタニアの教育一般について、ユニセフの *The State of the World's Children 2015* ([http://www.unicef.org/publications/files/SOWC\\_2015\\_Summary\\_and\\_Tables.pdf](http://www.unicef.org/publications/files/SOWC_2015_Summary_and_Tables.pdf))の数字を挙げれば、人口389万人のうち成人識字率は46%、青年(15-24歳)識字率は男66% 女48%。初等学校純就学率は男68% 女73%、中等学校の純就学率はデータがなく、純出席率が男26% 女22%となっている。

<sup>30</sup> 都会には煙草や麻薬があり、またヨーロッパ人を含む外国人が多く住み、彼らの悪い慣習が行われるので、親は都会の環境を子供の宗教教育に良くないと考える(2014年1月30日 マータ・ムラーナ コーラン学校の校長スィーディー・モハメット・タファ)。マータ・ムラーナ村に親族を持たない少年が、国内の他の場所からこの村に学びに来る場合、アル・ハジが適当に少年の受け入れ家庭を決め、少年の親はその家族に少額の支払いをする。マータ・ムラーナの家族の多くが、このような子供を受け入れている(2014年1月21日 マータ・ムラーナ モハメット・フラーニー)。どの小学校も、国内の他の場所から来ている子供と外国人の子供の実数を把握していなかったが、小学校の校長たちは外国人の生徒の国籍として、ガンビア、セネガル、マリ、ナイジェリア、ギニア共和国、南アフリカ共和国を挙げた。

<sup>31</sup> (2014年1月27日 マータ・ムラーナ 高等学校の数学教師モハメット・ディディ)

受験者の 60～70%が合格する<sup>32</sup>。

続いて、イスラーム教育の学校について述べる。イスラーム教育の学校は、マハダラ (mahḍar) と呼ばれる<sup>33</sup>。マータ・ムラーナ村には、3 種類のマハダラがある。

#### ① 初等のコーラン学校

マータ・ムラーナ村では、普通の発育の子供なら 3 歳からアラビア語の読み方を学び始める。この段階では、母親など女性が教える。5 歳になるとコーランの暗記を始める<sup>34</sup>。村には子供向けの小さいコーラン学校が約 40 あり、女性教師が経営する女兒向けのコーラン学校も多い<sup>35</sup>。少年向けのあるコーラン学校では、国内の諸都市から来た少年と外国から来た黒人の少年の、合計約 30 人が寄宿生活をしながら学んでいる。校長によれば、ここに来る少年の多くが、コーランを全部暗記して免許を得るまで学ぶ。早い子供は 10～14 歳で、コーランの暗記を終えて免許を得る。村では毎年 60～70 人がこの免許を得るが、その男女の割合は半々である<sup>36</sup>。

#### ② 成人男性向けのイスラーム学校

村の西の砂丘の、「マアリファ」(神についての知識)と名付けられた場所に小さいモスクがあり、木曜日を除く毎日の午前中、4 人の教師がこのモスクに来て、青年以上の年齢の男性に、より進んだ教科を教える。学生は自分で学びたい教科と本を選び、個人指導を受ける<sup>37</sup>。教師のひとりにアル・ハジの息子ムハメッド・ミシュリがいて、彼は午後には「女性と子供のためのセンター」で教える。

#### ③ 女性と子供のためのセンター(Centre pour les Femmes et les Enfants)

この学校は個人所有の家屋を借りて、成人女性を教える。教室の壁には、イブラヒマ・ニアスの肖像が掲げられている。ムハメッド・ミシュリは、次のように説明した。アル・ハジはすべての女性が学ぶべきだと考えて、この学校を開いた。イスラームは女性の価値を認め、高い地位を与えている。女性は家に閉じ込めておくべきで学問は必要ない、女性に価

<sup>32</sup> (2014 年 1 月 26 日 マータ・ムラーナ 中・高等学校の校長モハメッド・サリム)

<sup>33</sup> マハダラは正則アラビア語で「集まり」を意味するが、ハッサニー・アラビア語ではイスラーム学校をマハダラと呼ぶ。

<sup>34</sup> この情報は(2014 年 2 月 8 日 マータ・ムラーナ 高等学校のアラビア語担当の女性教師ビントゥ・バーイ)による。文献も、この情報を裏付ける。ザワーヤの男女の子供は、話し始めると文字を教えられる(Leriché 1952: 978)。子供は母あるいは母方親族から、最初のコーランの手ほどきを受ける。少年は 5 歳でコーラン学校に入り、正式な教育を始める(Stewart 1973: 29)。

<sup>35</sup> モーリタニアでは昔から、女性の教師が初等の教育を行うことが普及していた(Leriché 1952: 977)。

<sup>36</sup> (2014 年 1 月 30 日 マータ・ムラーナ コーラン学校の校長スィーディー・モハメット・タファ)

<sup>37</sup> モーリタニアでは、学生は伝統的に自分で師と学ぶ教科、学ぶ本を選び、師の授業に満足できないときには去って、別の師に就いた。授業に対する支払いの義務はなかった(El Hamel 1999: 77)。

値はないと考えるのは、イスラームを十分に学んでいない者たちである。男性と女性の役割は相補的である。女性は子供を教育する役割を担うので、女性の教育水準が低くてはならない。ムハメッド・ミシュリは、インターネットで情報を集めて授業に使う。近代的な革新を排除することなく、すべての良いものを取り入れ、すべての悪いものを排除しなければならない。ここで女性に教えられる教科は、男性と同じコーラン解釈、正則アラビア語、イスラーム法、法学、預言者ムハンマドの生涯などに加えて、道徳がある。道徳は、女性が家庭で子供を躾るために必要だからである<sup>38</sup>。

女性教育の重視は、アル・ハジとイダウ・アリー部族に限らず、ザワーヤに属する部族において一般的である。女性は15歳頃までにコーランすべてと預言者ムハンマドの生涯を熟知すべきだとみなす部族もあり、過去にも学識で知られた女性たちが多くいた(Leriche 1952: 979, 981-983)。しかしアル・ハジの場合、ザワーヤ以外の社会階層の女性を含む村の女性すべてに学問を奨励し、そのために学校を作った点が新しい。村の女性たちは勉強熱心なので、コーランをすべて暗記している女性が多いと村人たちは言う。あるアラビア語の教師によれば、若い女性の約8割がコーランを完全に暗記している<sup>39</sup>。しかし女性教育の重視にもかかわらず、マータ・ムラーナ村では女性がシャイクとして社会的に名声を得ることがなく、学校以外で女性が働く姿を見ることも少ない。イブラヒマ・ニアスの娘であるアラビア・ニアスはアル・ハジの第2妻であり、ムカッダムの免許を持っている。しかし彼女は親族以外の人を指導することがなく、指導は私の夫と兄弟たちの仕事だと語った<sup>40</sup>。前述したように彼女の同父の姉妹たちの中には、セネガルや他のアフリカ諸国で指導的役割を果たし、名声を得た人々がいることを考えれば、夫の国の慣習が、彼女の社会的な活動を制限したといえるだろう。ヒルによればモール人は、セネガルには男女の隔離がなく、女性の服装がより開放的であることを非難する。セネガル人のシャイクとその弟子たちがマータ・ムラーナ村を訪問した際に、アル・ハジは村人に対して、セネガル人を真似ずに我々の慣習を守れと説教した(Hill 2012: 71)。先述したようにアル・ハジはイブラヒマ・ニアスの精神が、イスラームとセネガルの文化とに根ざしながらも開放的だった点を尊敬している。モーリタニアの慣習は、男女の隔離と女性が身体全てを覆うことを要求するので、アル・ハジにとっての女性の地位向上は、女性が男性に伍して社会活動全般

---

<sup>38</sup> (2014年1月30日 マータ・ムラーナ イスラーム諸学の教師ムハメッド・ミシュリ)

<sup>39</sup> (2014年2月8日 マータ・ムラーナ 高等学校のアラビア語・哲学担当の女性教師アンマ・ビントゥ・アブダラー)

<sup>40</sup> (2014年1月27日 マータ・ムラーナ アラビア・ニアス)

に参加することをめざす西洋的な男女平等を意味しない。その実現の場は、主として家庭とならざるを得ないだろう。この村には女性の組合があり、小さい作業所でお茶道具の彩色や絨毯織りをしていると聞いたが、筆者はその場所を見つけることができなかった。

## 6. マータ・ムラーナ村で学ぶ外国人ムスリム

2014年1月当時のマータ・ムラーナ村には、黒人ではない外国人ムスリムがイスラームを学びに来ていた。2人のスペイン人男性、ベルギー人の夫婦、南アフリカ人の夫婦と子供2人、1人のフランス人男性、1人のチュニジア人男性、1人のシンガポール人男性がいた。彼らは南アフリカ人の家族を除き、ニアセン信徒ではない。この村は、ニアセンのシャイクを村長とする周囲の村々とは異なって、ニアセン信徒であるか否かを問うことなく、学ぼうとするすべてのムスリムを受け入れ、教育を提供する。黒人以外の外国人ムスリムが学びに来るのも、この村だけである。彼らは、ここは静かで勉強するのに理想的な環境だと語る。成人の外国人ムスリムたちは、それぞれのレベルに応じて、砂丘の上のモスクで開かれるイスラーム学校に通ったり、あるいは個人的に先生に就いたりして学ぶ。砂丘の上のモスクの近くには、1~2人用の小さいテントが約30あり、そこには30人~40人の黒人青年と1人のシンガポール人が住んでいる<sup>41</sup>。彼らは皆、モスクのイスラーム学校で学ぶ。彼らはアル・ハジから昼食と夕食の提供を受け、勉強に専念する。

かつてこの村にはもっと大勢の欧米人が住み、スペイン人だけで常に約20人がいた<sup>42</sup>。ヒルによれば、アル・ハジは1980年代に、フランス人の弟子たちを村に統合しようとして、彼らを村の女性たちと結婚させた。また1990年代半ばから、多くのヨーロッパ人ムスリムが村に滞在し始めた(Hill 2012: 64, 72)。2008年には、フランス人の4家族が村にいた(Tuquoi 2008)。しかし現在、フランス人の家族はこの村に残っていない。後述するテール・ヴィヴァントというNGOの例のように、アル・ハジはこの村の近代化を進めるために、欧米人の弟子を村に定住させて、彼らが持つ進んだ知識や技術、先進国での人脈を継続的に利用しようとしたと考えられる。それはまた、世界市民的なムスリム共同体の建設という、イブラヒマ・ニアスの理念にも適う。しかし、その計画は成功しなかった。テクワによれ

---

<sup>41</sup> 黒人青年の国籍は、セネガル、マリ、ガンビア、ギニア・ビサウ、モーリタニアが確認できた。ニアセン信徒も、そうでない者もいる。シンガポール人男性は次のように語った。「私はここに来て2年になる。アル・ハジは最初私を村の家に寄宿させたが、村の中は気が散るので、自ら望んでテントに移った。雨期には雨漏りし、夜は寒い、この村の環境は勉強に最適なので、あと10年ほど滞在したい」(2014年1月27日 マータ・ムラーナ マレー系シンガポール人マー・イル)。

<sup>42</sup> (2014年1月27日 マータ・ムラーナ アル・ハジ)

ば、欧米人はモーリタニアではほとんど収入が得られないので、本国で収入を得てマータ・ムラーナ村に来ることを繰り返す者がいる(Tuquoi 2008)。筆者の調査期間中に滞在していたベルギー人の夫婦と2人のスペイン人も、本国とこの村との間を行き来していた。

## 7. 「教育都市」計画実現のための財源

### 7.1 シャイクに対する贈り物ハディーヤ(hadīya)

アル・ハジは、マータ・ムラーナ村の外から来た学生たちと単身赴任の教師たちに無料で食住を提供し、また砂丘の上のイスラーム学校や菜園などの諸施設の運営に責任を負う。彼の息子たちや村人たちも、寄付によってアル・ハジを助ける。この村の周辺、ニアセンのシャイクを村長とするトゥンブヤーリ村とバーブ・アル・ファトゥフ村でも、村長は村の神権的な長である。2つの村にはそれぞれ、数百人の子供が学ぶ大きいイスラーム学校があり、村長たちは西アフリカ諸国から生徒を集め、無料で食住を提供する。バーブ・アル・ファトゥフ村では、村の発電機を動かすための石油や住民の家の建設資材まで、村長が負担する<sup>43</sup>。これらの村長たちに共通の財源は、彼らが弟子たち、特に外国人の弟子たちから得る宗教的な贈り物ハディーヤである。

先述したようにザワーヤは、様々な名称と形態の宗教的な贈り物として税収入を得たのだが、そのひとつに、貢納者がシャイクに対して捧げるハディーヤという名称の贈り物がある(Stewart 1973: 54-58)。スーフィー教団一般におけるハディーヤの意味づけは、たとえばイブラヒマ・ニアスの“*Spirit of Good Morals*” (Niasse 2001)の中に見ることができる。これはイブラヒマ・ニアスによるアラビア語原文を、彼の娘の息子であるアサン・スイセが英訳し注を付けたものである。ニアスは、弟子はシャイクに対して死体洗淨人の手の中にある死体のように完全に服従せよ。弟子の宗教的な進歩は、彼がシャイクを愛する程度に比例する。弟子はシャイクを喜ばせ満足させるために自分の富を費やせ、と述べた。アサン・スイセは、シャイクのために富を費やせという勧めを次のように注釈した。指導者であるシャイクはアッラーの僕の長なので、シャイクは恵みを受け、苦痛を免れているべきである。だから弟子は自分の所有するものを、金銭であれ体力であれ健康であれ、シャイクに提供すべきである。シャイクはそれを、貧しく弱く病気の者に再分配するだろう(Niasse 2001: 31-32)。この説明によればアル・ハジの国内外の弟子たちが、彼らのシャイクであるアル・ハジの「教育都市」計画の実現のために、資金や肉体的・精神的労働を捧げ

<sup>43</sup> (2014年2月5日 バーブ・アル・ファトゥフ 中・高等学校の校長 名前不詳)

て献身するのは当然であることが理解できる<sup>44</sup>。

## 7.2 非政府組織テール・ヴィヴァント(Terre Vivante)

アル・ハジは1993年に、テール・ヴィヴァント(「生命ある大地」以下T.V.と略す)というNGOを創設した。T.V.の本部は、ヌアクショットにある。ヒルによれば、アル・ハジのモール人とフランス人の弟子たちがT.V.の創設に協力し、その幹部職員はすべて彼の弟子である(Hill 2012: 74)。「教育都市」計画の「発展と快適な生活に必要な最小限のものを重視する」という方針は本稿の4.2ですで見したが、村のインフラストラクチャー整備のための資金は、アル・ハジに捧げられるハディーヤに加えて、T.V.を通じて先進国からもたらされる。ここで、すでに本稿で幾度か用いたヒルの論文(Hill 2012)を取り上げよう。ヒルはマータ・ムラーナ村を、「混成の(hybrid)」世界市民主義、すなわち地域と宗派を超えたグローバルなイスラームを志向するイスラーム的な世界市民主義と、人類一般の発展をめざす世俗的な世界市民主義とのふたつを信奉する村と規定した。T.V.の使命は、この村をイスラーム的な世界市民主義の中心とするために、世俗的な世界市民主義を標榜する国際的な援助団体と関係を持ち、グローバルな人、物、知識、金の流れを利用することである。それゆえT.V.の指導者たちは、非ムスリムの援助関係者に対しては世俗的な世界市民主義を強調し、イスラームは文化的慣習として控えめに示すにとどめる(Hill 2014: 64, 66, 73)。T.V.の公式ウェブサイト(<http://www.terrevivante.net/nav/organigramme.html>)の最初には、マータ・ムラーナ村はスーフィーの霊性(spiritualité)の中心地であり、その宗教的活力によって、モーリタニア全土と世界の諸地域に広がるネットワークを通じて人や技術を動員することができるので、自らと全国の貧しい地域の持続可能な発展のための手段としてT.V.を設立した、と記されている。しかしこれ以外には、このNGOの宗教性を示す記述はない。ところがヒルの論文の後に作成され、筆者の調査時には本部を訪れる人に配られていた

---

<sup>44</sup> 筆者はモール人のニアセン信徒におけるハディーヤの実態について未調査なので、参考としてセネガルのニアセン信徒におけるハディーヤについて述べる。セネガルのニアセン信徒たちは、ハディーヤは義務ではないが、自分にタルビヤを与え導いてくれるシャイクに感謝の気持ちを示すため、できるだけ多くのハディーヤを捧げたいと語り、折に触れて現金を捧げる。ニアセンの本拠地であるカオラックを取り巻く農村地帯では、特定のシャイクのために特定の畑をニアセン信徒が集団で耕作し、収穫物あるいはそれを売った現金を捧げることも行われる(盛 2014)。信徒が自分の現世的な願望成就のためにシャイクに祈ってもらう時にも、ハディーヤが捧げられる。ヒルによれば、アル・ハジ自身も宗教行事のたびごとに、多くの弟子を連れてカオラックに行き、多額のハディーヤをニアセンの指導者たちに捧げる(Hill 2012: 67)。モーリタニアは、たとえば隣国セネガルと比べても物価が安いので、外国人から現金で捧げられるハディーヤの価値は大きいと考えられる。



“Présentation de l’ONG Terre Vivante Janvier 2014” (『非政府組織 T.V.の紹介 2014 年 1 月』) という文書は、T.V.の宗教的な方向性を明示する。この文書の要約は、次のようである。

T.V.の使命は、市民社会の創出、人権の尊重、貧困との戦い<sup>45</sup>、女性の地位向上と共同体への参加の促進である。T.V.が目指す発展は、支配的な西洋によって押しつけられた暴力的な近代化ではなく、モーリタニアの遺産である伝統的・宗教的な諸価値を回復し、それらを拠り所としながらの近代化である。T.V.は、「北」と「南」の真の相互性の確立を目指す。西洋は物質的・技術的に繁栄していると見えるが、実は人間性の喪失に苦しんでいる。西洋は物質的な豊かさをモーリタニアに分け与えることができるが、同時に貧しいモーリタニアから、人間を本源に回帰させ人生を豊かにするところの徳を受け取ることができる。重要なのは、近代教育と伝統教育との両立、そしてマータ・ムラーナ村で実現されているところの、他部族・他民族に対する開放性とモーリタニアの文化との両立である。

T.V.のウェブサイトには 2003、2005、2006 年の報告書が示されているだけだが、『T.V.の紹介』には、T.V.が創設以来行った主なプロジェクトが 60 と、企画した 9 の教育プログラムが挙げられている。それらはトラルザ地方で行われ、その多くがユニセフ、世界銀行などの国連の組織や、イギリスのオックスファム (Oxford Committee for Famine Relief)をはじめとするさまざまな援助団体から資金提供を受けたか、あるいは、それらから委託されたプロジェクトである。セネガル河の氾濫の際に合衆国大使館に委託されて行った緊急援助(2003 年)、ユニセフの出資によって行ったヌアクショット郊外のごみ処理プロジェクト(2008 年)などに混じって、マータ・ムラーナを受益者とする発電機の設置(1996 年と 2003 年)、女性の組合の支援(1996 年)、先述した菓草園の開設(2001 年)、下水設備(2004 年)、上水道の導水管網の拡大(2011 年)や、これも先述した菜園のための種子の配布(2012 年)などのプロジェクトが見いだされる。マータ・ムラーナが受益者であるプロジェクトの多くは、ヨーロッパの NGO の出資を受けた。ヒルによれば、アル・ハジのヨーロッパ人の弟子たちが、これらの NGO と T.V.の間を仲介した(Hill 2012:74)。T.V.は、国連 NGO である。『T.V.の紹介』によれば、T.V.は 1998 年に砂漠化防止条約(UNCCD)の事務局によって締結国会議のオブザーバーに認証され、2005 年には国連経済社会理事会(ECOSOC)の特殊協議資格を得た<sup>46</sup>。2006 年に T.V.はモーリタニアの NGO としては最初に、国連経済社会理事会の社会

<sup>45</sup> モーリタニアは、2014 年の国連の後発発展途上国リスト(List of Least Developed Countries [http://www.un.org/en/development/desa/policy/cdp/ldc/ldc\\_list.pdf](http://www.un.org/en/development/desa/policy/cdp/ldc/ldc_list.pdf))の中に入れており、脚注 29 にも挙げた The State of the World’s Children 2015 によれば、人口の 23%が 1 日 1.25 ドル未満で生活する。

<sup>46</sup> ECOSOC のウェブサイト(<http://www.un.org/en/ecosoc>)によれば、T.V.は 2010 年に 1 年間の資格停

開発委員会(CSocD)と国連人権理事会(UNHRC)の会合に参加した。

### 7.3 宗教的な「贈り物」としての開発援助

アル・ハジは筆者と盛弘仁に対して、村は資金が乏しいので外国の援助を求めており、「君たちは援助団体の関係者ではないが、もし人脈を持っているなら助けてほしい」と語った。しかし次のように続けた。「モーリタニアは貧しく、日本は豊かだ。しかし我々は乞食ではない。我々には、尊厳ある協力しかできない。この村には真の霊性、真の宗教がある。イスラームは隠された秘宝である。もし君たちがこの村で、イスラームは平和とともにあることを体得するならば、我々は協力することができるだろう<sup>47</sup>」。マータ・ムラーナ村が提供するイスラーム的価値との交換として日本からの援助を受け取りたいというアル・ハジのこの言葉は、『T.V.の紹介』がいう『北』と『南』の真の相互性の確立への要求である。そしてまた、前述したウェブサイトの「我々は君たちが、よりよい世界のための、よりよい教育というこの偉大な企ての発展に参加することを歓迎する」という記述の含意を説明する。アル・ハジは、このウェブサイトを見た先進国の人々が、彼の「教育都市」計画の理念に共感してマータ・ムラーナを訪問し、イスラームを学ぶと同時にさまざまな種類の援助を提供することを望んでいるのである。

アル・ハジが T.V.を通じて求めるのは、経済的強者が人道主義、煎じ詰めれば憐れみを動機として経済的弱者に与える「施し」ではなく、物質文明の中で拠り所を失った人々が、人間にとって根源的な文化的・宗教的価値を維持する人々に対して、尊敬と賞賛という動機から提供する協力、いわば「贈り物」である。ここにおいて援助を与える者と受け取る者の関係は、対等であるというよりむしろ、受け取る者の方が高い。アル・ハジにとって、彼が宗教的な「教育都市」としてデザインしたマータ・ムラーナ村に、彼が創設した T.V.を通じて「北」からもたらされる開発援助は、彼に対して捧げられる現代的なハディーヤ、いわば広義のハディーヤと意味づけられるだろう。むしろ、T.V.を介して行われるプロジェクトの現場において、アル・ハジが一方的に人間性の喪失に苦しむと決めつけるところの「北」の援助関係者が、プロジェクトに対して自ら与える意味づけは、アル・ハジのそれとはまた異なっているだろうが。

---

止を受けており、本稿執筆時の 2015 年 8 月には ECOSOC の特殊協議資格を持っておらず、国連事務局アフリカ特別顧問室(OSAA)と協力関係にある。

<sup>47</sup> (2014 年 1 月 27 日 マータ・ムラーナ アル・ハジ)

## 8. おわりに

セネガルのカオラックで、ニアセンが盛大に祝う預言者ムハンマド生誕祭の前日にあたる2014年1月12日に、アル・ハジは2人の側近とともに、アフリカ諸国の記者たちと会見した。側近たちは、イブラヒマ・ニアスはイスラームにおいて、人類の平和という観念を発展させた偉大な宗教指導者だと述べた<sup>48</sup>。アル・ハジは、アフリカは自信を持つべきだと述べた。「アフリカには未来がある。霊性と諸価値がある。我々はアフリカに富と子供たちを持ち、イスラームの場所を持っている。我々は自分たちが持つ諸価値、とりわけイスラーム、とりわけスーフィズムの価値を知るべきだ。我々が貧しいことがあるか?」<sup>49</sup>。

マータ・ムラーナ村の「教育都市」計画は、モーリタニアが継承したイスラームという遺産をいわば「元手」として企画された「村興し」計画だといえる。この計画は、預言者ムハンマドの子孫として、またイスラームの守護者として名声を享受してきたイダウ・アリー部族に属すアル・ハジが、部族の伝統である教育とイブラヒマ・ニアスの教えを結びつけて作り上げた思想を理念とする。アル・ハジはまた、現代における理想のムスリム共同体にとって不可欠な物質的側面における発展のために、村の若者たちに良い教育を与え、彼らの将来的な活動に期待するだけでなく、外部から資金を獲得する手段を案出した。それは、彼がすでに達成した成果(近代教育と伝統教育を両立させるシステム、レベルの高い高等学校、国内外から訪れるさまざまな部族・人種・国家の人々によって村の中に形成される世界市民的なムスリム共同体、村の滞在者に提供される歓待と教育)や、国連NGOであるT.V.の名声などによってマータ・ムラーナを国内外に広く宣伝し、彼の思想に賛同する全世界のムスリムと非ムスリムの両方から、狭義と広義のハディーヤとして資金を獲得することである。これはアル・ハジが、宗教的活動に対して捧げられる贈り物として収入を得るというザワーヤの学者の伝統的な方法を、情報化・グローバル化した現代世界の状況に適合させて編み出したものだといえる。

しかし最後に、マータ・ムラーナ村の「教育都市」計画の実現には、少なくとも2つの根本的な問題があることを指摘しておきたい。第1に、この村には少数ながら、アル・ハジの神権的なリーダーシップと全体主義的な方法を批判する者がいる。それは宗教上の理由からではなく、職業上の必要から村に移住してきた人々である。たとえば、村の中・高

---

<sup>48</sup> (2014年1月12日 カオラック アル・ハジの側近であるモハメット・フラーニーとモハメット・ハーフィズ・ハイリ)

<sup>49</sup> (2014年1月12日 カオラック アル・ハジ)

等学校に勤める都会育ちの2人の若い女性教師は、この村の生活を異常と感じており、アル・ハジは個人の自由、特に女性の自由を侵害し、彼が考えるところの理想的な宗教生活に、住民を強制的に引きずり込んでいると批判した<sup>50</sup>。第2に、この村の厳しい自然条件が、インフラストラクチャーが整備された近代的な宗教都市としての村の継続的な発展を、はたして許すのかという問題がある。たとえば、村の各戸に引かれた水道と村の外れの棗椰子園・菜園は大量の水を消費するので、1958年に掘られた村で最初の井戸はすでに涸れ、現在4基ある深井戸も1基が涸れ、他の1基は塩水のために使用できない状況である。

## 参考文献

- Dedoud Ould Abdellah (2000) Le 'Passage au sud': Muhammad al-Hafiz et son heritage . In Triaud, Jean-Louis et Robinson, David (éds). (2000) *La Tijâniyya: Une confrérie musulmane à la conquête de l'Afrique*. Paris, Karthala, pp.69-100.
- El Hamel, Chouki (1999) The Transmission of Islamic Knowledge in Moorish Society from the Rise of the Almoravids to the 19<sup>th</sup> Century, *Journal of Religion in Africa*, X XIX, 1, pp.62-87.
- Hill, Joseph (2012) The Cosmopolitan Sahara: Building a Global Islamic Village in Mauritania, *City & Society*, Vol. 24, Issue I , The American Anthropological Association, pp.62-83.
- Hiskett, Mervyn (1980) The "Community of Grace" and its opponents, the "Rejecters": A debate about theology and mysticism in Muslim West Africa with special reference to its Hausa expression. *African Language Studies*. 17, pp.99-140.
- Hutson, Alaine S. (1999) The Development of Women's Authority in the Kano Tijaniyya, 1894-1963. *Africa Today* 46(3-4), pp.43-64.
- 苅谷康太 (2012) 『イスラームの宗教的・知的連関網—アラビア語著作から読み解く西アフリカ』, 東京大学出版会.
- Leriche, A. (1952) De l'enseignement arabe féminin en Mauritanie, *Bulletin de l'I.F.A.N.* Tome X

---

<sup>50</sup> この見解は(2014年2月8日 マータ・ムラーナ 物理の教師 U.K.とフランス語の教師 T.B.)による。発言の内容と、この2人が現在もマータ・ムラーナ村で在職中であることを考慮して、筆者の判断で名前はイニシャルとした。この2人はフルベである。フルベをはじめとする黒人諸民族は、植民地時代から行われたフランス語での普通教育をモール人より広く受容したので、彼らは一般にモール人より外国語が堪能である。現在普通学校では、文系教科が正則アラビア語、理系教科がフランス語で教授されるので、文系教科の教師はモール人、理系教科と語学(フランス語・英語)の教師の多くは黒人であり、黒人の教師は他所からマータ・ムラーナ村に赴任してくる。

IV, n° 3, Juillet, 1952, pp.975-983.

Marty, Paul (1916) *Étude sur L'Islam Maure (Cheikh Sidīa-Les Faḍelia, Les Ida Ou Ali)*, Collection de la revue du monde musulman, Paris, Leroux.

盛恵子 (2014) 「セネガルで成立したティジャーニー教団の分派ニアセンの予備的研究—成立と拡大・タルビヤと境界の超越について—」, 『スワヒリ&アフリカ研究』第25号 pp.86-105.

Niang, Habib (出版年不明) *La Spaciologie (Théorie de l'ensemblement des mouvements)*, Liban, J.S Saïkali.

Niasse, Ibrahim (2001)(1920) *Spirit of Good Morals*, translation and commentary by Hassan Aliyyu Cisse, 2<sup>nd</sup> edition compiled and edited by Abdul Hakim Halim, Kaolack, The African American Islamic Institute, ISBN: 0-9677956-0-5(-1-3).

(2013 retyped) *The Three stations of the deen/religion (Maqāmāt al-dīn al-thalāth)* Translation and Exegesis by Abubakar Sidiq Yusuf, Ilorin, Nigeria, (10 ページの小冊子).

(2010)(1934-1935). *The Removal of Confusion. Concerning the Flood of the Sainly Seal Ahmad al-Tijani*. Translation by Zachary Wright, Muhtar Holland and Abdullahi El-Okene, Louisville, Fons Vitae.

Norris, H.T. (1962) The History of Shinqit, according to the Idaw ‘Ali tradition, *Bulletin de l'I.F.A.N.*, T. X XIV, sér.B. n<sup>os</sup> 3-4, pp.393-413.

Paden, John N. (1973) *Religion and political culture in Kano*. Berkeley, University of California Press.

Seesemann, Rüdiger (2004) The Shurafā' and the “Blacksmith”: The role of the Idaw ‘Alī of Mauritania in the career of the Senegalese Tijānī shaykh Ibrāhīm Niasse (1900-75). In Scott S. Reese (ed.), *The transmission of learning in Islamic Africa*, Leiden, Brill, pp.72-98.

(2011) *The Divine Flood: Ibrāhīm Niasse and the Roots of a Twentieth-Century Sufi Revival*. Oxford University Press.

Stewart, C.C. and E.K. (1973) *Islam and Social Order in Mauritania : A Case Study from the Nineteenth Century*. Clarendon Press.

Tuquoi, Jean-Pierre (Envoyé spécial) (2008.2.27) La cité idéale de Maata Moulana, *Le Monde*. (<http://www.lemonde.fr/afrique/article/2008/02/27/la-cite-ideale-de-maata-moulana-1016247-3212html>)